

## ロバート・ブラウニングの独白詩「サウル」

三 谷 正

(一) 序

(二) 懊悩のサウル救済に向うダビデの弹奏

(1) 無心の歌と有心の歌

(2) 客体的人間の喜びの歌

(3) 主体的人間の喜びの歌

(三) ダビデの情熱と永遠の生命

(1) 人間的ダビデ

(2) 情熱の人ダビデ

(3) 幻想の人ダビデ

(四) 結び

(一) 序

人間が幸福であるというのは、人間の身体機能が最も調和的に働き、調和的経過を辿るときである。人間の身体機能が調和的働きを失い、精神機能に狂いを生ずるとき、人間は身体の休息を必要とし、苛立つ精神に気晴しを与えることが肝要である。このとき、音楽は人間の心身の機能、特に精神機能に調節的效果を与えるということが昔から考えられている。古代人は人間の憂鬱、譎言、狂気などは悪鬼の仕業と考え、これ

を払いのけるのに音楽の効果に期待をかけていたのである。牧羊者の少年、豎琴の名手ダビデ〈David〉が悪鬼に憑かれ懊悩するサウル〈Saul〉王を、豎琴の音によって癒すという旧約聖書の物語、従ってこれを材料として、ものされたこの詩も、この考え方を取り入れたものである。しかしダビデは、かれの豎琴によってサウルの魂を癒すということは失敗に終わっている。即ちダビデの豎琴の音楽の効果は得られなかった。このため、音楽の効果という点から見れば、この詩はダビデの、狂えるサウル救済の失敗の単なる記録にすぎなくなる。然るにダビデは「人を高めるとは、その為す所にあらずして為さんとする意志なり」(三)の(2)の(引)の信念より、かれはサウルの魂を癒すことの不可能なるを知らながらも「熱意こそは最上のものなり」④或は「火と生命はすべてなり、火と生命なきものは無なり」⑤の言葉そのまま、猛烈な熱意を以って、火と生命の情熱を燃やし、飽くまでもサウル救済を望むのであった。ブラウニングがダビデの灼熱的友愛、また、これを中心として神の聖なる愛を情熱的に描き出したのが、この「サウル」一篇の宗教詩である。更に、エドワード・バード〈Edward Berdoe〉が、ある医者言葉の借りて「この効果(音楽の)は、従来知らされている人間の心に気晴しを与えるということと同時に、人間の神経に振動を与えるものである」⑥と言っている通りに、音楽は狂える人間の魂に気晴しを与える力以外に、その人の神経にある種の振動を起す効果がありとすれば、ブラウニングは、この詩の中に、ダビデの灼熱的友愛と情熱的聖なる神の愛を描くことによって、ヴィクトリア朝の人間の魂に、ダビデの豎琴の音にも比すべき壮大、崇高な「サウル」一篇の宗教詩を提供し、魂の狂える当時の人間の神経にある種の振動を起し、その覚醒を促すことを意図したものと考えることも、あながち空言とは言えぬであろう。

## (二) 懊悩のサウル救済に向うダビデの弹奏

### (1) 無心の歌と有心の歌

ブラウニングは少年の頃、野や森を心ゆくばかり駆け廻り、鳥が巣を作るのを見たり、その囀りに耳を傾け聴き入る習慣があった。その経験の多くを、後年、かれの詩に取り入れたため、鳥獸、昆虫の名が、絶えずかれの詩に現われて来るのである。また、リー〈Margaret Lee〉がパラセルサス〈Paracelsus〉の中の詩句⑦について、「ブラウニングの自然を扱う奇妙な特徴は、小鳥、小動物及びその習性を、一連の躍如たる言葉を以って叙述することを好む点にある」⑧と言っている通り、ブラウニングは自らの口笛によって鳥獸、昆虫を誘き寄せて楽しむ癖があっ

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

た。その最もよく表現された典型的なものが、人口に膾炙されている童話の詩「ハメリンのまんだら笛吹」〔The Pied Piper of Hamelin〕である。この鳥獣、昆虫を愛好し、それらを誘き寄せ癖があったために、かれはこの「サウル」の詩に於いても、羊、鶉、蟋蟀、飛鼠などの性情をいとも巧みに折りまぜて、それらを誘き出す豎琴の妙なる演奏をダビデに行わせ、これによって悩めるサウルの魂を救済させるのである。先づ無垢の象徴とも思える羊を誘う歌をもって始め、次いで鶉が弹奏者のあとを追う快活の曲、蟋蟀が互に戦う勇壯の曲、飛鼠が静思する沈痛の曲を奏するのである。古来、純潔、無垢の音楽は、無心の小鳥、動物に通ずると言われている。従って無心の鳥獣に通ずる音楽は、無心の人間には当然通ずるはずである。然るに神の法に背き、悪鬼に憑かれた無心ならぬ有心のサウルの心には、ダビデの奏する無心の歌は通じなかつたのである。ブレイク〔William Blake〕の「無心の歌」〔Songs of Innocence〕も無垢の幼な児ならでは、かれの清い心を率直には伝え得なかつたが故に、「有心の歌」〔Songs of Experience〕をものしたのではなかつたか。そこでブラウニングも、ダビデをして、有心の歌、即ち経験世界の音楽を奏せしめるのであった。収穫時の農夫の相互扶助の歓びの歌、偉人の死を悼む葬送の悲しみの曲、婚礼の喜びの歌、進軍の勇ましい曲などを奏せしめるのであった。有心の世界にあっては、人はそれぞれの生活の悩み、別離、死別の悲しみはあっても、その人が真摯な人間であれば、ここに人間愛が生じ、相互扶助の喜び、愛の喜び、また、世の悪との戦に互に手をとる喜びがあるものである。ブラウニング夫人〔Elizabeth Barrett Browning〕の「小児の叫び」〔The Cry of the Children〕がこれを示している。然るに真摯な人間の心情から遠ざかり、神の法則を破り、神の愛に背けるサウルにはダビデの奏する人間愛の歌も、その心に通じなかつたのである。しかしダビデが司祭の神前で行う壮重の合奏を弾ずるに及んで、サウルの頭は少しく動き、その頭の宝玉が揺めくのであった。人間愛の曲に心動かなかつたサウルの心も神の法則を破り、神の愛に背いた罪を心の奥底に感じたからであった。けれどもこれも一瞬のみであつて、その身体は依然として柱に懸つていたのであった。

(2) 客体的人間の喜びの歌

サウルの身体は依然として柱に凭り懸るとは言え、一瞬かれの心の動けるを見たダビデは、サウルの心の狂い救出の奏功の第一歩を得たと思

い、  
「おお、われら壮年の最盛時、

われらの活力の旺盛なることいかばかり。

霊は少しの空費を感ずるなく、

筋肉は一つだに、その活動をやめず、

筋骨は一つだに、弛むことなし」<sup>⑥</sup>

と力強く堅琴を奏するのであった。サウルの壮年期は、この詩句そのままに心身共に調和の状態にあった。故にこの幸福に対する神の恩寵を、サウルの心に想起せしめ、神に背いたかれの心の反省を促し、以って悪鬼を除こうとしたのであった。ダビデは更に奏する。

「生きることこの上なき喜びなるかな。

岩から岩へ躍び上ること、

縦の木の太枝を力強く裂くこと、

池の生ける清水に躍び込み、白銀の肌さわり感ずる冷たさを感じること、

熊を狩る楽しさ、

獅子もその草の床に蹲る蒸し暑さをもとせざること」<sup>⑦</sup>

と。これは人間の客体的存在としての喜び、特に力満ち溢れる壮年期の喜びを歌ったものである。われわれはこの喜びを率直に受け容れるべきである。サウルはこの喜びを今まで受け容れ、楽しんで来たのであった。故に、かれは神にそれを感謝すべきである。然るに感謝の念を忘れ、ただ死を待つが如きサウルの現在の状態は断じて許さるべきでない、客体的喜びの大切なることを示すため、<sup>⑥</sup>及び<sup>⑦</sup>の詩句を、今迄にも増して心をこめて弾するのであった。<sup>⑥</sup>及び<sup>⑦</sup>に類する詩句がブラウニングの他の詩「ラバイ・ベネズラ」<sup>⑧</sup>、<sup>⑨</sup>「Rabbi Ben Ezra」及び「クレオン」<sup>⑩</sup>、<sup>⑪</sup>「Cleon」にも見出すことが出来る。これらの詩句は、ブラウニングが当時の知識層の人生の不安、生きることの疑惑などの心の動揺に対する警鐘と受けとれるものである。われわれが、人生に不安を感じ、生きることに疑惑をもち、人生にいかに幻滅を感じても、われわれが人間に生れた以上、生きて行かねばならない。これはやむにやまれぬ、どうしようもない人間存在の過程そのものである。生きる以上は健康に生きて行かねばならぬ。われわれは人生にいかほど価値の尺度を見失っても、人間であることは、他の生物であることよりもよいことである。健康に生

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

きることは病の床に苦しむより幸福である。兎にも角にも人間は生きねばならない。故にブラウニングは生きる望みを失ったサウルに対し、上述の力強い生きる喜びの詩句を弾するのであった。そして更にダビデをして次のように言わせるのである。

「……食事し、寝ること――

輝くすばらしき金粉もて蔽われ、黄色に熟せる棗椰子、

水さしに浸せる蝗いなごの肉、

なみなみと杯に注がれし葡萄酒、

曾て、清水いと静かに、小鳥の囀る如き音たてて、

流れしことを蒲告すすきげるも、今、乾枯ひからびし河床に寝ること」<sup>⑩</sup>

と。人間が生きて行くには、人間はよく食わねばならぬ。神の与える美味を楽しく食わねばならぬ。また健康に行きに行くには、よく眠らねばならぬ。神の与える楽しい睡眠をとらねばならない。これらは人間が生きて行くに必須のことであるというのである。ダビデはまた、

「人の生きること、

ただ生きるのみにても、いかによきかな。

常に喜びのうちにありて、

すべての心情、すべての靈性、すべての感覚を用いること、いかによきかな」<sup>⑪</sup>

と。実に、人間は生き、且つ食い、眠り、単に生きることだけでも、いかに幸福であるか。そしてこの幸福のうちに、人間のすべての知性、靈性、感性を無意識のうちに用いる、否、そのうちに没すること、いかによきことであろうか。

ダビデは更に歌うのである。サウルが軍が率いて幾多の戦功をたて得たのは、サウルの父の守護があったためであり、その成功を見ずして世を去った母の愛のあったためであり、また、戦に於いて援助を惜しまなかった兄弟の愛があったためである。これら身辺のすべての人達の愛があつてはじめて戦勝を得、功績をあげ得て国民に尊敬され、予言者サムエルに見立てられて王となり、一切のものを掌中に収め得たのである。これらに対しサウルは深く感謝すべきことを歌うのであった。そしてダビデはサウルの狂える魂の恢復を望むこと切なるあまり、声高くサウル

の名を呼ぶのであった。自らの名を呼ばれ、サウルの身体は動くのであった。そのさまを描く豪壮な詩句、<sup>⑧</sup>即ちサウル王を山岳に、その身体の動くさまを、山岳を蔽う白雪の崩れ落ちるに譬えたすばらしい比喩的表現は、この詩中、最も詩的香りの高いものとなっている。ダビデはサウルの醒めかけた心を支えるには尚も歌うにしくはない、歌こそは生命の美酒(次章(3)参照)を絞り出すものである。この美酒をサウルは飲むべきであるとして、生命の美酒を絞り出す歌を奏しつづける。サウルは漸くこの生命の美酒を称える迄にはしたが、これを飲むことはしなかった。サウルはダビデに生命を称えしめ、自らは死を願うものようであった。これはサウルが既に人生の喜びを感じなくなっていたからであった。人間は生き、且つ食い、眠り、身辺の人に愛されても、尚、満足せず、更に何か事を成し遂げ、自らのこの世の存在を示す記念碑、金字塔を打ち建てたい希望を抱くものである。ブラウニングはこの機微の人情を把えてダビデに言わせている。

「王の為せる行為は、その一つ一つ

消え去るも、また、甦り、世に役立つ。

そのさま、太陽、地を見おろすのとき、

雲、太陽を蔽うとも、また、嵐その光を消すとも、

太陽自らの運行により、生れざるもの一としてなきを見、

あらゆるところに、過ぎにし夏の盛時の成果を辿るが如し。

王の意志の光、また、王の熱情と勇気の閃きに、

はるか時経るのちに到りても、無数の民草の心、

情熱もて沸きたぎり、遂に、かれら、その歎呼を子等に伝え、

その子等、亦、その子等に王の行為の根源の光彩を南に北に放つなり」<sup>⑨</sup>

と。そしてサウルの死後、その偉業を称え、その記念碑を打ち建ててであろうと、

「サウル王身罷り給いしか、谷間深き処にその陵をつくれ。」

四角に積み重ねたる大理石の灰色の山を高くなし、空に達するまで築き上げ、

ロバト・ブラウニングの独白誌「サウル」

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

偉大なる最初の王の眠り給う処を明示せよ。

民、その勲を知らんと望めば、

仰いで山の上なる天然の岩面を見るがよし。

その岩面は、学者の刻める大いなる文字もて、

サウル王、かくかくの御仁にて、

かくかくの偉業なし給いしと記録さるべし。

賢人指導せるも、この記録、

王の偉業の半ばをも表わさずと民衆責めん。

その欠陥を償わんと、木立の中において、

他の木と共に生長せる一本の杉の幹の頂上に、

(見よ、民衆の前に額となれる杉の平面を)

民衆、称讃の言葉を費し、彫刻師の金箔もて、

サウルの伝記を記すならん。

帷幄の臣の頌栄と詩人の美辞共に並び記されん<sup>④</sup>

と歌う。ホーソン〈Nathaniel Hawthorne〉の短編「大志ある客人」〈The Ambitious Guest〉の中の青年が、埋れた人生を送るには堪え得るも死後に忘れ去られるに忍びざる思いのうちに、人生の金字塔を打ち建てる希望を胸に抱きつつ流離の旅をつづける心もこれであった。人間は誰しも、客体的人間の喜びの最後には、自らの存在を示すべき金字塔を打ち建てるという抑え難い希いをもつものである。かくしてダビデも、この最後の喜びを歌うのであったが、これもサウルには一向に通じなかったのである。

### (3) 主体的人間の喜び

ここにダビデは主体的人間の喜びをもって更に救済の努力をつづけるのであった。ダビデは歌う。

「人も獣も共に持てる唯の朽ち果てる生命より生ずる

単なる慰安を却け給うは正しきことなり。

われらの肉体には生命の枝生じ、

われらの魂には生命の実生ず。

王、その木の緩ゆるやかに生い立つことに気づき給いしことあらん。

その枝、はじめ、か弱く揺れおの戦くも、

遂には、仔山羊の唇、牡鹿の角よりも高く生い延び、

然るのち、その枝、扇状に、無事に拡がり行くなり。

また、この木、順次に花開き、

完き棕櫚の木となること覚え給わん。

されど、ここに、これに勝りて、王の学び給うべきことあり。

この実と共に来るもの、より善きものたることなり。

その果汁、人の悲しみのすべてを療すことあるのとき、

棕櫚の実を、われら疎んずことあるべきや。

その生い立ち遅々たるも、実を結ぶことあらば、

棕櫚の木そのものの惨たる姿、氣にとどめ給うことあるべからず。

幹と枝、朽ちるとき来り、

その木の立てるところ、人に知られずなることあらん。

されど、その棕櫚の酒、人、冬の苦境あえに喘ぐとき、

人の霊のすべての傷を癒すことあり、

ロバト・ブラウニングの独白誌「サウル」



われ、王に、かかる生命の酒を注ぎまつる。

肉体は、その相應しき運命に任し給え。

永遠の生命に醒め給いし靈こそ御身のものなれ。

老令、御身に打ち勝つるとき、

未だ生命に醒め給わずありて無意識に過し給いし生活より、

より善き生活を樂しみ給うべし。

永遠の生命に醒め給わざりし、先きの少年の生活を打ち碎き給え、

然らば、そこに、生命の美酒ほどばしり出ざるを見給うべし<sup>⑨</sup>

と。われわれは肉体のあるがままに、ただ手足を働かす存在であれば、それはただ客体的に存在するにすぎない。人間が人間であると言ひ得るのは、人間が主体的な存在でなければならぬ。人間が主体的な存在であるとか、人間が主体的に生きるというのは、人間が人間というものに従つて、また、人生というものに就いて何等考えることなく、ただあるがままの肉体的生活、また、単なる物質的な機械的な生活といった客体的な存在から脱し、人間というものの、人間の存在、人生というものに対し、主体的な考えをもつようになることである。さきに述べた人間が生き、食ひ、人に愛され、事を成し、金字塔を打ちたてる生活は、人間のやむにやまれぬ人間存在の過程そのものであるため、単に獸的生活乃至物質生活或は機械的生活として却けられないものではあるが、しかし客体的な存在としての人間の姿であることには変りはない。とは言つても人間が一面、生物である以上、この客体的存在としての生活も大切である。否、大切以上である。然しながら、人間は生物であると同時に人間である。生物以上の人間である。人間が生物以上というのは、人間が生物のもっていないものをもっているからである。人間には永遠とか、無限とかいったものを求める心がある。人間存在の根源を求める心がある。これがため、人間は生物的な面、獸性といったものに一時羞恥を覚え、偉大な先哲、偉大な古人が深山幽谷に籠つて修業に精進したあの心情となるのである。ここにはじめて、人間は主体的な人間存在の姿、人間の本質を把握するに到るのである。

(大手前女子大学論集第二号拙論「生命の感性的智慧とイギリス浪漫派詩人」参照)

われわれが客体的存在の人間として生き、食ひ、人に愛され、事を

成し、金字塔を建てる生活をブラウニングは、「われわれの肉体には生命の枝生じ」と言ったのであり、われわれが主体的存在の人間として人間存在の根源を求め、永遠、無限を求める生活を、「われわれの魂には生命の実生ず」と言ったのである。また、客体的存在としての人間の肉体は棕櫚の幹、枝と同様朽るときあり、その姿も惨たるものとなるが、この惨たる姿となり、客体的存在の亡びるところにこそ、生命の美酒が生ずるのである。故にブラウニングは、

「永遠の生命に醒め給わざりし、先きの少年の生活を打ち碎き給え、

然らば、そこに、生命の美酒ほどぼしり出るを見給わん」

とダビデに言わせたのである。かくしてわれわれが主体的存在の人間として生きるところに真の人間らしさが生ずるのである。

### (三) ダビデの情熱と永遠の生命

#### (1) 人間的ダビデ

ダビデは、懊悩のサウル救済にあらゆる手を尽し、最後に永遠の生命を説くこと切なるものがあつた。けれども、これもサウルには通じなかつた。遂に堅琴を捨て、歌を捨て、やりきれない思いのうちに神に向つて、神業を批判する傲慢な言葉を発する。

「われ、神の創れるもの、すべてを歌えり、

よろずのことを語り尽くせり。

かく歌わんため、かく語らんため、

神、われを創れるものなれば、

神の創れる一切を、わが頭脳に受け容れ、批判し、

それを称え、それを咎める言葉返せり」<sup>⑩</sup>

と。自負に驕る平凡な人間の人間性そのままを暴露するのである。しかし、もともと神性に近いダビデなるため、かれは神の前に立つとき、直ちに、神の法に従い、神の愛に包まれたダビデとなり、

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

ロバト・ブラウニングの独白誌「サウル」

「されど、今、神業につき人の言えるは、  
すべては愛なれど、すべては法。

されば、今、神のわれに与えし批判の権を捨ててななり。

われの神を認める力、露の一滴求めし処に、得たるものは深淵なりき。

われに知識ありと言ひ得るや、

かかる知識、神の叡知の啓示に遇えば、面喰い、縮み上らん。

われに先見の明ありと言ひ得るや、

かかる先見、無限者なる神の配慮に比するとき、

何たる半盲、空なるものなるか。

われ、事の成功を思ひて、

最高の能力を用いしと言ひ得るや、

否、われ、ただ眼を開けば、

完全無欠なるもの、われの思ひしその尽に、

わが目前に現われ出でたり。

星に、石に、肉に、靈に、土塊つちくれに、

神の姿を、われ認めたり。

かくて、われ、わが心のうちを、

また、わが廻りを見、

われ、神に頭、頂うたま垂れて、

ここに、わが魂の向上計り得らるる、

あの魂の謙讓の心持ちて、

完全ならぬ人間の、

完全無欠の神への、

服従の心を新らたにせり。

これ、われ、心のうちに、

新らたに神を敬うたび毎に、

神のみもとに登り得るがためなり」<sup>⑩</sup>

と。かく、ダビデは、神の前に立つとき、神の完全無欠を称え、人間の無力、不完全なるを認め、人間はただ神の心に従ってこそ、人間の心が日に新らたになり行くを覚えるのであった。しかしこれ程、神の心に服従することが、人間の心の新らたになり行くを信ずるに拘らず、次の瞬間、またもや、自負心が頭を上げ、神性に近いダビデから人間ダビデに逆戻りするのであった。そして言う。

「しかも、われ、裕かなる経験のすべて得、

この神性知らされて、尚、

われ、わが本領、自らの天賦の才を、

敢えて発見せんと努むなり。

この才能、用いることの楽しく、

隠すことの困難なる力なり」<sup>⑪</sup>

と。けれども、また、敬虔のダビデに帰り自負の念を撤回して言う。

「されど、われ、この力抑えおきたし。

われ、この力用いるの権と自負を主張し、

わがこの力の賦与者なる、

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

諸人知れる神の力、神の愛を、

凌ぐこと、われの恐れるところなり。

しかはあれど、見よ、もし、

われ敢えて、愛の力用いるを望むとせば、

われに愛する力のあること明らかなり。

ただ、愛のひとすぢ道にありて、

神の歩みを、人の追い越すを恐れるが故に、

われ、自負の心を撤回せんと思ふなり。

われ、愛のために慎つつしまん<sup>⑨</sup>

と。神の偉大な神性を知りながら、自らの本領、天賦の才を敢えて用いたき弱き人間性のダビデ、しかし、神の前にあるを自覚すれば、それを抑制するダビデ、また、一瞬、傲慢の心、自負の心に負け、また、敬虔の心に帰るダビデ、全く以って平凡な人間、人間らしい人間の面目躍如たるダビデであった。けれどもダビデは矢張り偉大であった。平凡なわれわれと異り、最後には、人間はすべて瑕だらけであるため、完全無欠の神に従ってこそ、真の人間に成り得ると感じ、全知全能の神の命に従うことの正しさを覚るものの如くであった。

## (2) 情熱の人ダビデ

しかし、かく、神の命に従うことの正しさを覚れるダビデに帰りながらも、尚、その胸底に、サウルの悪鬼を自らの力によって取り除こうとする熱望が、かれのサウルに対する深い愛の止め難い一念となって沸き上るのであった。この愛の一念は、神の、ダビデに与えた賜物としての愛する能力から生れ来るものと考えるのであった。ダビデが神によって、人を愛し、人を愛する力を与えられている限り、かれが悪鬼に悩むサウルを愛する力をも与えられていると思うのであった。サウルは神が創れるものである。ダビデも神の創れるものである。神が自ら創れるものを愛することは自明のことである。また、ダビデが神及びサウルを愛する能力そのものも、神の賜物である。神によって創られたダビデが、神の与える愛する能力を以って、神の創れるサウルを悪鬼から救わんとし、しかもそれを為し得ざるを、神はそのままに捨ておくはずはない。完

全無欠の神の愛は、不完全なダビデの愛の力を憐み、援助を与え、力づけるに相違ない。かく考えたダビデは自らの魂に問うのであった。

「わが魂よ、われのサウルへの愛を如何に思うや。

われのサウルへの愛、今を限度に、更に進むことなしと思うや。

大小の扉九十九まで開きたるに、

第百の扉に魂消ることあり得べきことなるや。

いと小さきことを為すの力を信じ、

いと大いなることを為すの力を信ずべからざるか、

神の賜う最終の賜物、わが愛の力、余りに充ちてあれば、

わが愛の力、神の力と競わんを神疑い給うと思うや。

或は、これ本末顛倒にして、

創られしもの、創り主に勝り、

終りなるもの、始められし主に勝ると思うやいかん。

われ無力ながら、人を救わんの情熱のうちに、

サウルのため、すべての力尽さんと望むに、

神は救いの力持ちながら、

サウルを救い給うことなしと敢えて疑うや。

かれの心を満たすべき不思議の賜物なる生命を、

われ、歌に歌いて、かれに授けるを望み、

未だその実を結ばざるわが意志、

神に劣れるこの力、この意志、この力こそ、

ロバト・ブラウニングの独白誌「サウル」

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

かかる魂、かかる肉体、かかる土塊に、

生命の力充たして、全世界を蔽わんため、

わが心に入り来りしにあらざるか。

かくてこれら善きものを与え、

更につづきて、尚一つ、

最善のものを与え得る力、この力こそ、

わが心に入り来りしにあらざるか。

(わが熱き涙、これを証するにあらざるか)

かれを助け、かれを救い、恢復せしめ、

この完全を最高に保ち得て、

死の闇の刹那に次ぐに、

生の曙光を以ってせんため、

過ち犯せるサウル、敗惨のサウル、

今、その魂、廃墟となれるサウルに、

その危機に臨んで手をさしのべ、

かれを救い、その悪夢、試練、兇非よりかれを目覚ましめ、

新しき光、新しき生命の中に、

爽やかに、安らかに、身を置かせること、

わが意志、わが愛の力にあらざるか。

—新しき光、新しき生命、

これ新しき調和にて、

しかも尚、経験され、継続され、

終局となるもの―

その終局を誰か知らん―

否、永続さるべきものならん。

この人、人生の夢により充分の教えを得、

死後の永世の確信を得ん。

この人、胸を傷めし苦悩によりて、

強められたる至福をかち得、

浮世に於ける戦により、

来世の報いと休息を得るならん」<sup>⑧</sup>

と。ダビデは目に熱涙を浮べ、サウルに新しい光、新しい生命を与え、永遠の生命に甦らせようとの情熱に満たされる。遂にこの情熱が最絶頂に達するや、今までのかれの言葉、行為の一切が焼きつくされ、ただ残るは情熱の炎のみとなり、その炎は、はるか天上に舞い上り、信仰の炎と化し、

「われは信ず。

与えるは、なんじ神にして、

受けるは、われなり。

世の最初にお在しませし御神の、

中によろずの終局すでに含まる。

信ずるわれの力は、御心の中にあり。

ロバト・ブラウニングの独白誌「サウル」



すべては御神の賜物なり。

御神のわが祈りば答え給うの速きは、

われ、この息を吹き、

この両腕を宙にひろげるに同じ。

この世の諸々の事、人生、自然、

御神の恐ろしき軍勢も、

御神の意志より流れ出づるなり。

われ、もしわが意志より出づる云々と言わんが、

単なる塵埃だにわれを軽蔑すること必定。

然るを、何が故に、われ、無力を見るを、

或は無為を直視するを嫌悪するや。

何が故に、わが無力なるを軽視して満足するや。

何が故に、われ無力なるに絶望の感を抱かざるや。

われ、無力なるわれに絶望せざるは、これなり。

人を高めるは、その為す所にあらずして、為さんとする意志なり。

見よ、サウルを―

われ、かれを救わんとして得ず、

わが願望、失敗に終りぬ。

われ、もしかれを悲しみより、救いあぐるに全力を尽し得ば、

われ、かれを富ますに貧困となり、かれの生命を充たすに、

われ、餓死することあるも何かあらん。

われ、かれを救わんの意志、われに在るを知れば足る。

この故に、かれに尽すわが事の完きものなるを知悉す。

今わが口を通し、御心を語り給え、

われ、わが愛するサウルのために、

苦しむことを望まんか、

御神も亦苦しみ給わん。

さればこそ、えも言えぬ最高、最大の冠は御神のものなり。

かくて、御神の愛は無限の世界にあまね普く満ちて、

上にも下にも、創られしものの、

立ち入るべき一地点も残すことなからん。

救いの力、死と争うは、

言葉にあらず、目付きにあらず、

はた、手振りにもあらず。

御神の愛の全能なるの普く知れわたりいる如く、

その愛と共に、また、その愛のために存在する、

御神の愛の力の全能ならんを切に祈り奉る。

最も多くを人に為すもの、最も多く耐え、

最も強きもの、最も弱きものたらざるを得ず。

われの叫び求めるは、強きにありて、弱きに立つを忍ぶことなり。

ロバト・ブラウニングの独白誌「サウル」

われの求めるは神性の肉、われ、これを求め見つけたり。

おお、サウル、

なんじを受け容るるは、わが顔の如き顔ならん。

なんじは、われに似し人を愛し、

永久にその人によりて愛されん。

わが手に似し手、なんじを導き、

新生の門をなんじに開かん。

見よ、キリストぞ立つ<sup>⑧</sup>

と。ダビデのサウルを愛する熱誠は、遂にこの熱烈な神への祈りとなり、ここに十字架のキリスト出現の予言が実現されたと感じたのであった。「見よ、キリストぞ立つ」に到ってこの情熱的愛の抒情詩は宗教的最高潮に達する。エドワード・バードは「これは恐らくブラウニングのすべての宗教詩中最も壮大な最も美しいものである」<sup>⑨</sup>と言っている。

### (3) 幻想の人ダビデ

ここにダビデの情熱は救い主キリストの出現を予言し、「見よ、キリストぞ立つ」の幻想を抱くに到ったが、その神秘的幻想はダビデを駆つて、天啓により地も空も動揺をはじめ、やがてそれも静まり、ここに地も空も一新され行く宇宙の理法を口にさせるのである。

「その夜、われ、いかにして家路につきしや、われしかと知り得ず。

目撃者、諸々の天使の軍勢、

言葉には表わし得ず、目にも見えず。

<sup>ひしめ</sup> 轟ける存在の気配あるのみ。

生命あるもの、意識あるもの、

わが廻り、右に左にあるのみ。

これらを制し押え、これらの中を通りぬけ、

家路につくの努力と困難、

死活の便りを飢えるが如く待つ民衆の、

飛脚を取り囲むが如し。

大地は万物目覚め、地獄に落ちしものも解き放たれたり。

夜の星、感極まりて鼓動激しく、

事の次第を知りながら、口にし得ざる苦しさを、

炎の中に閃き出だせり。

されど、この激しき天地の発動に、

われ、気を失うことなかりき。

神の御手、尚も、われを促し、且つ支え、

騒動のすべてを抑えに抑え、

静けき聖なる指図下して、

それを静め給えばなり。

遂には狂気収まりて、

地上の万物、休息の静寂に帰し、

暁には、かの騒動大地より消え失せぬ。

われ、しかと見たり、かの騒動、

暁のしじまの中に消え失せるを、

凝縮し、色強き灰色の山中へ、

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

ロバート・ブラウニングの独白誌「サウル」

新らたに畏敬覚え揺れ動く森の中へ、

俄かに起る戦の風の中へと、

目を反らし、横目使いつ訝り恐れて、

のそのそと逃げゆく驚きの野獣の中へ、

われ近づけば、恐れのために、心麻痺れ、

重もたげに飛び立つ、身冷たく強張れる鳥の中へ、

かの騒動、消え失せるを、われはしかと認めたり。

音すら立てず、そっと去りゆく蛇のうちに、

新しき宇宙の理法、われ感じたり。

同じ宇宙の大理法、

開花のために上向ける花の面にも表われたり。

同じ宇宙の大理法、

杉の心と葡萄の繁みを動かせり。

小川はこれを証して、絶えず低く囁きぬ、

耳には聞えぬほどの声なれど、

げにその通り、その通りと繰返し囁けり」

と。この詩句を読むとき、平素はわれわれの目から隠くされている世界、しかしわれわれの少年の頃、妖精物語の中、または、夢路を辿るとき或は年長じての白日夢、孤独閑静の夢想の中に、いつか、どこかで触れた世界が繰り広げられている感を抱くのである。これは異常な世界、われわれの目から隠された世界、従ってわれわれの目に見える外面世界ではなくして、われわれが、われわれの心の内に見る世界である。われわれが主体的人間となって、はじめて見る世界である。それにしても、この詩句は一読不気味であり、われわれを惑わすかに思えるものである。然

しながら、また極めて魅惑的であり、われわれの内心をゆさぶるものを持っている。それは、この詩句に出て来る万物は、一見、混乱無秩序に現われるかに見えながら、そこに一つの神秘的理法の厳然たる存在によって背後から統一されているからである。ここにこの詩句は、物慾、虚偽の多い現実世界とは別な生命を甦らせる霊的高さと深遠さをもつ世界を示していることをわれわれに感ぜしめるものである。随性的、日常的現実世界を掘り下げ、また解体して、夢幻化しながら、われわれが日々失いつつはあるが、われわれの内心に、また、われわれの目の届かぬ陸のところにあつて、最も大切なもの、即ち永遠の生命へのつながりの憧れの心、これをこの詩句は示しているのである。これがダビデの憧れの世界であり、また、ブラウニングの憧れた世界であったのである。この故に、この詩句、即ち「サウル」一篇の詩の最後のこの節は、ダビデの情熱の最高のものであり、この節のあることにより「サウル」なるこの詩をして、宗教的幻想の妙なるものにしてるのである。アーサー・シモンズ〈Arthur Symonds〉も「サウル」一篇の詩は、生命と時と永遠の洞察である。しかも壮嚴な歌のうちに語られ、その洞察は確固不動である。この詩を結ぶ終節の大地と大地の声のすべてより成る合唱交響曲は、詩の文脈とは別のわかり易い言葉を用いながらも、最も偉大な詩句中の一つに数え得るものである」<sup>⑧</sup>と云っている。

#### 四 結 び

独白詩「サウル」は宗教詩としては、実に、壮大な宗教詩である。しかし、この詩は人間の罪の問題に触れた信仰の告白を中心とした宗教詩というよりは、寧ろ神の完全無欠、神の愛の讚美の雰囲気の中に、欠点の多い生きた人間ダビデの人間性とその情熱を文学的に表現し、永遠の生命への憧れの心を表わす宗教的抒情詩であると思う。また、オア夫人〈Mrs. Sutherland Orr〉が「それは高揚された人間の心のやさしさに始まり、キリストに於いて示される聖なる愛の予言者の幻想に終る」<sup>⑨</sup>と云っているように、高揚された人間のやさしさと、生命的な聖なる愛の熱情的抒情詩であり、且つ力強い予言者の幻想の宗教詩である。

参考文献及び註

(I) 参考文献

1. James Fotheringham : Studies in the Poetry of Robert Browning

ロバート・ブラウニングの独白詩「サウル」

ロズ・ノハカリハノ鳥田繪「ホハニ」

2. Roma A. King, Jr. : The Bow and the Lyre
3. Arthur Symons : An Introduction to the Study of Browning
4. Mrs. Sutherland Orr : A Handbook to the Work of Robert Browning
5. Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia
6. M. Lee and K. B. Locock : Browning's Paracelsus
7. Edward Dowden : The Life of Robert Browning
8. 石田 憲次 } 註釈 Men and Women, Vol II  
石川林四郎 }
9. 齊藤勇 サウル

(II) 註

- ① Browning : Bishop Blougram's Apology, l. 556
- ② *ibid.*, ll. 557—558
- ③ Edward Berdoe : The Browning Cyclopaedia, p. 464
- ④ Robert Browning : Paracelsus, Book I, ll. 36—48
- ⑤ M. Lee and K. B. Locock : Browning's Paracelsus, p. 81
- ⑥ Robert Browning : Saul, st.9, ll. 68— 69
- ⑦ *ibid.*, ll. 70— 73
- ⑧ *ibid.*, : Rabbi Ben Ezra, st. IX
- ⑨ *ibid.*, : Cleon, ll.291—299
- ⑩ *ibid.*, : Saul, st.9, ll. 74— 78
- ⑪ *ibid.*, ll. 78— 79
- ⑫ *ibid.*, st.10, ll.104—110
- ⑬ *ibid.*, st.13, ll.163—171
- ⑭ *ibid.*, ll.177—189
- ⑮ *ibid.*, ll.148—163
- ⑯ *ibid.*, st.17, ll.238—241
- ⑰ *idid.*, ll.242—254

- ⑱ ibid., ll.255—258
- ⑲ ibid., ll.258—262
- ⑳ ibid., ll.263—286
- ㉑ ibid. st.18, ll.287—312
- ㉒ Edward Berdoe : *The Browning Cyclopaedia*, p. 464
- ㉓ Robert Browning : *Saul*, st.19, ll.313—335
- ㉔ Arthur Symons : *An Introduction to the Study of Browning*, p. 89
- ㉕ Mrs. Sutherland Orr : *A Handbook to the Work of Robert Browning*, p. 238